婦人衛生雜誌

大正七年九月三十日發行

第三百四十三號

婦人衛生雜誌

第三百四十三號目次

講演

○妊娠に就て　醫學博士　河島右一

叢談

○喀血の話
○感冒に對する自然の防備
○ヒステリーと云ふ病氣

育兒

○疫痢に就て
○初めての乳の與へ方
○百日咳及び實扶垤利亞の看護法

抄録

○經濟的榮養料理

雜録

○家事科學展覽會
○東京市の井戸
○電氣火葬株式會社の創設
○名古屋市の結核消毒施設
○警視廳の看護婦試驗
○看護婦養成所指定
○產婆生徒募集

廣告

○前號の講演につき○入會及轉居

謹告

來る十月十二日(第二土曜日)午後一時半より本鄕區湯島お茶の水高等女學校附屬作樂館に於て本會例會を開き衞生講話有之筈につき會員諸姉の御來會あらんことを乞ふ

大正七年九月

私立大日本婦人衞生會

私立　大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを旨とし殊に希はざるはあらじされども其身健康にあらざれは此生活を得んこといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も／＼衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきこととなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を怠るもの、如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尙之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞姉妹の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗槪を敍べて廣く江湖の諸姉妹に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月　　首唱者總代

私立　大日本婦人衛生會規則摘要

（明治卅二年十二月改正）

第一條　目的本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續巻末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但し既納の會費は總て返戾せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、本會記者若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は毎年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る　幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の件●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除く外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし附後に員數の增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に同送すべきを以て其會費を支會より本會に送付すべし　支會限りの會員にて雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし●雜件

第三十條　本會は隔月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿冊に登記し尚本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送發として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替にて口座番號東京一〇六〇〇〇番本會事務所宛に振出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議員會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市本鄉區駒込千駄町五十番地

私立大日本婦人衛生會

講演

妊娠に就て

醫學博士　河島右一

唯今永井先生から民族衛生の大意に就ての御話がございましたが其御話を伺ひますと此民族を發達して社會の勢力を得るやうには人口を殖やしてどんどん出生率を多くしなければならぬと云ふ問題でありますが、それに就きまして私は其次にどうしたら人口を殖やすと云ふ其本になる妊娠と云ふことに就てお話致したいと思ふのであります。

それより前に少しく申上げたい事は今歐洲の戰爭は大分熱が下りまして世界の人が皆戰爭と云ふことに就て厭いて來たのである。然るに此戰爭は是から先何時已むのか解らぬ、獨逸では十年戰爭或は三十年戰爭とか言ふものもあつた位であるから、今後十年續くか二十年續くか分らない狀態になつて來て居る。此戰爭が果して何時治まるかと云ふことは分らないが、此戰爭が止むと云ふ豫言が色々あるので、近くは今でも之に就て金力缺乏の爲めとか或は食糧が無くなると云ふやうなことで解決が付くかも知れぬが、自分の醫者の立場から解釋して行くと、此戰爭が永く續くか何うかと云ふことは、金力よりも、食糧よりも、人口の問題に歸着するだらふと思ふ。今日の戰爭は日清、日露の如き小さな戰爭ではない。一日に於て何十萬と云ふ人間が死んで居る、之を積もると大變な數になる。それを各國とも大なる生産力を有つて居る青年時代の者を殺して居る、それが年々積ると大變な損害になつて、一方で生産力を有

つて居る者が死ぬと、既に生産力の衰へた其兩親が子供を設けると云ふことも出來なくなる。さうなると何うしても終には各國共に戰爭に參加して居る國が皆兵隊を送るにも兵隊が無くなりはしまいかと云ふ、さう云ふやうに兵隊を送ることが出來なくなつて戰爭が停む時代が來やしないかと思ふ。斯く戰爭の終結が人口が減ずると云ふことに歸著すると、縱令戰爭を行らむとしてもそれをすべき人が盡て出來なくなる。他の物は何でも出來るが、人口は時が來なければ出來ない。さうして見ると戰爭に依つて衰頽した國力を恢復すると云ふことは骨が折れる、故に戰後に於て此世界の最上位置になつて勢力を得べき者は人口の多い國が勢力を得るものではないかと思ふ。其處に到つて日本の狀態を考へて見ると――日本は餘り戰爭に加入して居ないやうな有樣ではあるが、實際は兵隊を出して居る。それで今日の戰爭の爲めには日本人も中に入つて居る。今のところではそれ程痛痒は感じない、戰後に於てもそれ程痛痒を感じないでせうが、是は單に痛痒を感じないと云ふばかりでは實はいかぬのである。何うしても是から發展して行くと云ふ上に於ては、是よりもまだ一層人口を殖やして、歐洲人の手の及ばぬまでに力を殖やすと云ふことに努めなければならぬのであります。ところが只今の永井博士等のお話の如く、文明が進むに從つていろ／＼な弊害が起つて來ると云ふことで、是は已むを得ぬ次第である。此文明の弊害が段々人口を多く增やす減すと云ふ上に於ても、矢張り現はれて來る。先程もお話になつた避妊と云ふこと……此避妊と云ふ事が近來日本にも大分流行つて居る、又屢々耳にするところである、新聞にも盛んに書かれて居るのを見て居る。是は非常に怖ろしい害毒で、文明に伴ふ弊害である。餘程注意しないと、日本が戰爭に餘り兵隊も失はず、今日のところ生產率も減ずると云ふこともないから健全だと云ふて威張つて居るけれども、其避妊と云ふことが流行ると云ふと大變な事になる。獨逸は此避妊と云ふ

ここが人口を減ずると云ふことに就て唯今では非常に苦心して居る。此間の新聞にも見えましたが、戰爭の終局を結んで此儘に行つたならば人口が減つて仕舞ふ、今の中にどん／＼人口を殖やさなければならぬと云ふて、是までは宗敎上道德上非常に賤んで居つたところの一夫多妻主義と云ふことを言ひ出して、政府が暗にそれを奬勵して居る。是は窮策上已むを得ぬことであつて、自分の國に出來得るだけ人を殖やさうと云ふ爲めには、道德も宗敎もなに構はぬと云ふ、それ程までに獨逸では苦心して居るのである。

　で日本はまださう云ふ風な苦心を爲る程にはなつて居らぬけれども、避妊と云ふことが此處で行はれると云ふことは最も歎かはしい次第で、獨逸は是まで禁じてあつたところの忌むべき主義までも敢てして增やさうとして居る。日本は平和無事と云ふ上から避妊を爲ると云ふかも知れぬが、是は餘程注意しなければならぬのである。此避妊と云ふ事は、是は日本にも昔からあつたに違ひないが、併し大體に於て西洋文明の喚起したものである。大所で生活難に迫はれると云ふ事と、上流社會、中流社會になると、子供が多いと社交的の事が出來ないとか、さういふ極く簡單な事柄からして實際さう云ふ風なことが起つて來たのである。若しも此避妊なるものが盛んに行はれると云ふやうなことになると、是までのやうな生產率がなくなつて、外の國より數を減じなければならぬと云ふ事になり、或る年代の後になると著しく減ずるやうになつて來はしないかと思ふ。

　是まで西洋文明が日本に入つて來ると同時に必ず弊害が之に伴つて來て、今日となつたのであるが、西洋文明が日本に入つて來ても其良い所をば成るべく取つて、惡るいものは成るたけ捨てると云ふやうにしなければならぬ。此避妊の問題も矢張りその弊害が蔓延せむとする時であるから、此時機に之を堰止めることに努めなければならぬのであります、さうして人口の增殖と云ふことに貢獻をして貰らふと

云ふことが必要である。吾々の立場からして避妊の惡るいと云ふことは勿論であるが此上にも妊娠してどん〳〵出產をして貰らふと云ふのには避妊と云ふことは絶對に反對を唱へなければならぬ。

之に就きまして避妊と云ふやうな點で或は人口が少くなると云ふので佛蘭西あたりでは非常に心配をして、今度の戰爭前に――平時に於て妊娠を奬勵する爲めに二人以上子供を產んだ者には政府は年々何金かの賞與を出すとか或は結婚しない者には結婚しなさいと言つて成るたけ結婚を爲せて澤山の人を儲けて從くと云ふやうな風にして居る。日本はさう云ふことまでも今日はしないでも宜い時代であるが、是が後になると其弊害が積重つて來て或は妊娠をしない人に對してはそれ〳〵の補助手當をして妊娠をさせると云ふことに指先を染めなければならぬやうな場合になるかも知れぬ。それであるから今の中に此の害毒を除いて貰らふ必要があるとすれば、婦人が自分の體は妊娠と云ふことに適當に出來て居るかどうか或は避妊をすると云ふことは健康狀態に於て害が有るか無いかと云ふことを少し考へて貰らはなければならぬ。勞働と云ふことに於て子供が少いと大變樂であると云ふ位な簡單なことで避妊をするやうになつて、さうして其害が大なる處に來るやうなことになる。

それで婦人は一體妊娠するのが當然か、妊娠しないのが、當然であるかと云ふことを考へて見ますと、吾々はそれに對して婦人は妊娠する者で、妊娠しなければならぬ者だと言つて御答へ申す積りであります。何故婦人は妊娠しなければならぬ者であるか、又妊娠すべき者であるかと云ふに、婦人の體と男子の體とは大變な相異があつて、一寸見ても男と女とは分つて、くり〳〵坊主になつたところで解らないことはない、兎に角裝飾を省いて見たところでも男子と女子とは明に區別が出來る。男女の明かな區別は婦人の特色と云ふ――妊娠と云ふことにある。是が特色とするところで、是はどうしても男子に眞似が

出來ない、男子は妊娠が出來ないが、婦人は妊娠が出來る、是が重なる違である。此妊娠をする、しないと云ふことが婦人と男子と全く異る。で此妊娠と云ふことは、人類の生存に於て女子だけにしか出來ないもので、此機能が備へてある以上は、此妊娠と云ふことは婦人の天職であつて、他の者の眞似の出來ぬ處である。他の物は男子でも裁縫も出來るし、料理の事も出來るけれども、妊娠だけは男子が出來ないと云ふ、是が確に婦人の天職であると言つて差支へないのであります。

此妊娠と云ふことに就ては、日本でも亦支那でも非常に婦人に重きを措いて、結婚をして子の無い者は去るべしと云ふ、死ぬるまで一所に住ひをして苦樂をともにすると言つて結婚をし子が無いと云ふて直ぐに別れると云ふことは餘程子と云ふものに對して重きを措いてあると思ふ。又子供の無い婦人は石婦と云ふて、支那あたりでは非常に賤められて居つたのであります。であるから子供の無いと云ふことは婦人に取つて非常に重大なことであらうと思ひます。又一面から言ふて見ると子供を有つと云ふことは其人の幸福で、子供の無い人よりか餘程幸福が多いことである。若い時は子が無くとも少しも差支へない、けれども年を取つて來ると子が無いと云ふことは非常に悲しむべきことである。又一方から見ると種族繁榮——自分の種族の繁榮を助けて行くと云ふことに對して子がないと云ふことはいけない、日本と云ふ國の種族を發達して行くに於て、何うしても子供が無ければならぬ、何の點から考へて見ても婦人の使命として必ず妊娠を要するので、此大事な使命を有つて居る其婦人でありながら、さう云ふ避妊とか或は妊娠をしてもそれを墮胎すると云ふやうなことは是は確に婦人の使命を果さないものである。婦人は此使命を果すに因つて敬すべき人であり、それに因つて社會の位置を取つて居るので、此天職を守るは人たるの道であると思ふのであります。是等は西洋文明が日本に入つて來る場合に附いて來る

惡るい附屬物であるから此點は良く注意したいのであります。

さうすると次に婦人が妊娠を爲るには如何なる條件が必要であるかと云ふ、是は餘程難ケしい問題であります。元來妊娠と云ふ者は婦人一人で出來得べきものでない、必ず受胎してそれに因つて妊娠と云ふものが行はれるのである。けれども妊娠と云ふものは昔から婦人にのみ重きを措いて、妊娠は婦人が爲ると云ふ、それで是は何う云ふ譯で妊娠と云ふものは婦人だけで妊娠するもので、婦人にのみ責任を負はしてあるのであるかと云ふことは餘程考へて見なければならぬことで、是は衛生の方で皆樣も既に御承知であらうが、人體の構造がさう云ふ風に出來て居る、女子には毎月一回來る月經の時に兩方の卵巣から一個宛の卵が出來る、それで毎月二個の卵が出來る。男子の精子と云ふものは何千何萬と云ふ數であるが、その何萬何千と云ふ澤山な數に對して婦人の受胎すべき卵は月に二個しかない。さうすると是が妊娠を爲ると云ふことに對する力は男子の方には多い、女子の方には少いのであるから、少い方に病氣でもあつて其機會を完全に果たすことが出來ないとしたならば、女子の方が其責任者にならなければならない、それだから何うしても妊娠の責任は獨り婦人にのみあると云ふやうな考が起る。それだから子無き者は去ると云ふて、自然婦人に責任を負はせるやうになるのは寧ろ仕方がないと思ふ。

それで婦人は如何にして妊娠し得るかと云ふ、妊娠する責任ある婦人は成るたけ妊娠をし得るやうな條件を備へると云ふことが必要である、それにはいろ／＼學問上の條件があるのでありますが、先づ第一毎月來るところの月經が正常に卽ち正しく來なければならぬのであります。是は毎月日が定まつて月の半とか月の末とか月の初めとか云ふ風に定まつて居なければならぬ、又持續して居る日數も五日乃至一週間と云ふものでなければならぬ。それから其月經の正順と相俟つて他の諸機關が健全であると云ふ

ことが必要である、何れ程正順であつても心臟病があるとか、結核だとか云ふやうな惡性の病氣を有つて居る場合には注意しなければならぬ。さう云ふ風な工合に身體が健康であると云ふことが妊娠第一の條件である、また其外にもいろ〳〵の條件がありますが、妊娠し得ると云ふよりか、どう云ふ風なことが妊娠し惡いのであるかと云ふことを知らなければならぬ、で何う云ふ事情が無かつたら妊娠が出來得ると云ふのが一番早解ではないかと思ふ。それで妊娠の出來ない理由はどう云ふ風なことがあるかと云ふと、妊娠しない譯は是は澤山な條件がある、妊娠し得ると云ふ條件よりも澤山擧げることが出來る、で先づどう云ふ條件があるかと云ふに第一先刻お話したところの月經が不調の者、是までは月の初めにあつたのが月の半になるとか或はそれよりかまだ前に早くなつて來ると云ふ風に月經が不調になつて、又其期間も是までは五日あつたものが一週間もあつたり又二日しかなかつたりすると云ふ風に不正になり、又其月經時にいろ〳〵な症狀が起つて或は下腹が痛かつたり、腰が痛かつたり、頭痛がしたり或は肩が凝つたり、いろ〳〵な全身に症狀が起つて來る、是等は妊娠を爲るには不適當な狀態である。斯う云ふやうな月經障碍になると妊娠がし惡い、それから子宮內から出る分泌物が白色を帶びた平素出づべからざる液が屢々出るとか、其量も大變多いと云ふことで兎に角平素出ないところのさう云ふ異樣な分泌物があると云ふことは妊娠を妨げるものである。それは先づ外から見た所のことであるが、今度內に入つていろ〳〵考へて調べて見ると、子宮の位置形狀、是の變化が大分影響するのであつて、子宮の位置は骨盤の中に特に小骨盤內に於て何の方面にでも動く、左右前後何方にでも動き得るものである、それが全體が後方に傾いて折出して居れば後屈症と云ふ、又子宮の形に變化を及ぼして其反對に前方に位置が寄り過ぎる、前方に屈曲するときは前屈――前傾と云ふ名前を付けて居りますが、是等は俗に白帶下――

子宮の內部の粘膜に關係が有るので、內膜に炎症を起して子宮內膜炎と云ふものを起すのである。其他子宮から輸卵管の炎症を起し、又卵を造くるところの兩方の卵巢が疾患を爲す場合がある、是も妊娠を妨げる。斯う云ふ風ないろ／＼な事が妊娠を妨げるものである。此妊娠を妨げるいろ／＼の病氣があつた場合には、是を取除いて完全にして置くと云ふことをしないと如何に妊娠を望んで居つても目的を果たすことが出來ない。此いろ／＼な病氣がある、其病氣を癒すと云ふ點に就ては、なか／＼普通の他の病氣とは違つて婦人に取つては重大なることになるのであります。

で普通の病氣が自分の體に出來た場合にはお醫者に診察て貰つて治療するけれども、此婦人の生殖器の病氣と云ふことになると云ふと、なか／＼診療をして貰らふと云ふことは餘程考へてゝなければ診察をして貰らふと云ふことはしない、これが最も困る事である。それで縱令簡單な病氣があつたにしても直ぐに診て貰らうて治療を爲ることが大切である。早く診て貰らへと云ふのは、病氣が起つて愈々今度診て貰らはねばならぬ時分には病氣が重くなつて居る、であるから病氣が起つたら成るたけ是が治療を早く受けると云ふことを考へなければならぬ。

で此婦人の病氣に就て御注意致したい事は、婦人の病氣は男子の病氣と違つて非常に此生殖器と云ふもの殊に妊娠と云ふことに關係が非常に親密になつて居る、何故親密になつて居るかと云ふと、每月ある月經と云ふものは全身の中の一定量の血液卽ち身體に充滿して居る必要なる血液が體外に出るのである。さうすると必ず出たゞけは身體に對して異狀を起させる、一升桝の水で見るも二勺か三勺出しても桝の總體に影響する。さう云ふやうに身體全體に影響すべき値を有つて居る。それであるから同じ病氣であつても頭が痛いとか、肩が凝る、腹が痛たいとか、さう云ふ先づ訴があるとすると、其場合に男子ならば單純に頭が痛いと考へるのであるが、婦人

の方は唯單純に頭が痛いと云ふことは直ぐに診斷を下すことが出來ない、さう云ふ時には吾々は先づ第一に月經を聞いて、それから始めて頭が痛いと云ふのは月經不調の爲めで頭が痛むのであると云ふ。同じ腹が痛むと云ふのでも、下腹が痛むのも上の方が痛むのもある、其お腹が痛いと云ふのでもそれが果して腸が惡いのか、腸は惡くないのに下腹が痛むこ云ふのは所謂生殖器に異狀のある爲めに起る影響である、さう云ふ風に婦人の病氣になると唯診ても直ぐ其處が惡るいと云ふことは出來ぬ　必ず一度は婦人の月經狀態に遡つて考へて見ると云ふ必要がある。さうして見ると婦人自身に病氣があると云ふ場合であつたなれば、自分の生殖器と云ふものに異狀がありはしないかと云ふことを考へなければならぬ、況んや自分の生殖器に對して病氣があると自分で自覺した場合になつたら直に其治療に取掛らなければ、他の病氣が無くても大變に衰弱して仕舞はなければならぬ。であるから現在自分がさうであると自覺したならば必ず醫者に診察して貰らふと云ふやうにしなければならぬ。單純に唯診て貰らふのは恥かしいと云ふやうな考ですすめば何んでもないけれども、是が後來自分が妊娠するに就ての最大條件であり、又妊娠と云ふことは婦人の使命として最も大切なものであつて見れば、是は是非治療しなければならぬものであると、其自覺から診て貰らはなければならぬと云ふことになるのである。それであるからして妊娠と云ふことに重きを措くべき婦人の生命がある間は、凡そ自分の體が惡るいとなつたら治療を加へて完全にして妊娠の出來ると云ふ覺悟を持つて世の中に處して戴かなければならぬと云ふことは永井博士と同感で一寸申上げたのであります。

叢談

喀血の話

醫學士　篠原昌治

血を喀く思ひなどと云ふことは人生の最も悲惨なることの形容に用ゐらるゝ言葉でありまして、喀血なる語は決して人の耳によい感じを與ふる者ではありません、喀血が斯く世人に厭惡せらるゝだけそれが如何にして發生するものであつて、それが又如何なる性質のものであるかと云ふことを知るのは頗る有益のことゝ存せられますから、今爰に喀血の御話を申上げたいと存じます。

喀血の原因として最も多きものは肺結核であります。元來喀血が世人から甚だ恐怖せられて居ります理由は、血液が人體に最も大切なものであつて、それを喀出すれば、それだけ身體の血液を失ひ、其爲に身體に危害を及ぼすであらうと云ふことよりも、寧ろ口腔より腥臭ある新鮮の血液を吐き出すことが、何んとなく身體に重大なる變化を生じたと云ふ一種不安の感じを與ふることゝ、又一つには喀血は多くは肺病の徵候であつて、既に多量の血液を喀出するほどであれば、肺臟は餘程ひどく侵されて居て、到底治癒る見込はないであらうと云ふ危惧がその主なるものであります。

肺結核に次で多く喀血の原因をなすものは肺二口蟲病であります。其他の肺疾患、即ち纖維素性肺炎、加答兒性肺炎、肺壞疽、肺膿瘍の場合にも屢々喀血を來すことがあります。

心臟瓣膜病も亦屢々喀血を來すべき疾病の一であります。

其他代償性肺出血及び神經性喀血なるものがあります。

諸種の氣管枝疾患、全身の榮養障碍、傳染病及び其他の種々なる疾患によつて喀血することがありますけれど、それ等は比較的稀なるものでありますから、今爰に一々之を掲ぐることを省略致します。

喀血は全く不意に來ることもありますけれど、多くの場合に於きましては、喀血する前には一種の自覺的症狀を發するものでありまして、それは或時は胸骨の後方に温き液の涌き上る樣な感覺があつて、それに續て咳嗽により喀血を來すこともありますし、又或時は口内に一種の鹹味若くは血臭を感じまして、其後咳嗽により血液を喀出することもあります。

喀出せらるゝ血液の量は、少きときは一二滴より多きときは一「リーテル」以上に及ぶものでありまして、少量の場合には喀痰中に一二の血點又は血線を現はすに過ぎないことがありますけれど、稍々多量なるときは多くは血液と喀痰とがよく混和して居るものであります。喀出せられたる血液の分量に就ては、患者は兎角之を過大視するものでありますから、大に注意せねばなりません。

喀出せられたる血液は新鮮のものであれば常に鮮紅色をなすものでありますけれど、血液が血管より出でゝ、それが口腔より排出せらるゝまでに時日を經るに從ひ暗赤色となり、漸次暗褐色より黄褐色に變じ、遂には全く其色を失ふに至るものであります。

肺結核は喀血の最も多數の原因をなすものでありまして、往時俗間では喀血さへあれば悉く之を肺結核の爲に來るものと看做して居たほどであります。而して肺結核の爲に來る喀血は從來全く健全であるか、又はたとへ身體の内部に於ては多少の病氣があつたにしても、外觀上には何等の異狀もなく、當人も自分が病氣であると云ふことは少しも氣が附かないで、全く健康なものと信じて居る際に急に喀血するものと、又既に明かなる肺結核の經過中に來るものとの二種類があります。

何等の疾病を自覺して居ない人が急に喀血しますれば、患者竝に其家族のものは斯る不意の出來事に對して甚しく驚愕するものでありますけれど、事實に於ては左程驚くべきものではありません、何となれば同じく肺病でありましても先づ喀血を以て始まるものは重症であつて、其他の症狀例へば咳嗽、喀痰等を以て始まるものは比較的輕症であるかの如く考へられますけれど、多くの場合に於ては全く其反對で、喀血を以て始まるものは咳嗽、喀痰等を以て徐々に發病するものよりも豫後は却て佳良なものであります。それは如何なる理由によるものかと申ますに、咳嗽や喀痰等で徐々に發病する場合には、患者はこれを普通の感冒であるかの如く考へて充分なる治療を行はず、其内に病氣はだん／＼進行しまして、患者にそれが重大なる疾病であつて、充分なる治療をせねばならぬと云ふことが氣附く時には多くは既に手遅れとなつて居るものでありますけれど、先づ喀血で始まるものは、患者は決して之を輕視することなく、病初より充分なる治療を行ふものでありますから、肺病の如く早期に充分なる治療を行へば、それだけ容易に治癒る病氣に於きましては、自然其豫後は佳良なるべきものであります

喀血は又肺結核の經過中何れの時期に於ても發現するものでありまして、多くの場合に於ては咳嗽と共に血液を混せる喀痰を喀出するものでありますけれど、時としては大量の喀血を來すことがあります、殊に其末期に於きまして肺に空洞を生じ、其壁にある血管が破れたる場合には大出血を來すものであります。

肺結核にして喀血を來す際には、多くは發熱するものでありますけれど、それは長く持續することなく、程なく喀血前の狀態に復するものであります。而して喀血は多くの場合に於ては疾病の經過に大なる影響を與ふるものではありませんけれど、時としてはそれが爲に以前健全であつた肺部位にまで疾病が擴延して、著しく病勢を増惡することもありま

す

喀血は一回のみで止むこともありますけれど、又屢〻これを反復し數日間持續することもあります。殊に大出血を來した時には極めて危險な樣に思はるるものでありますけれど、其爲に直接生命の危險を來す樣なことは極めて稀でありまして、多くは數日内に歇止するものであります、而して數回多量の喀血をしたにも拘らず病勢漸次消退し、再び健康を恢復するものも決して稀ではありませんから、たとへ喀血したとて甚しく悲觀すべきものではありません。

結核に次で多く喀血を來すものは肺臓二口蟲卽ち肺「ヂストマ」病でありまして、此者は最初岡山縣に於て喀血患者の死體解剖の際發見せられたものでありますけれど、其後の報告によれば我國に於ては殆んど到る處に地方病性に或は散在性に存在するものでありまして、本病は血痰を以て其主要症候とするものでありますけれど、其痰を顯微鏡下に檢査しますれば容易に其蟲卵を發見することが出來ますから、これが診斷は決して左程困難なものではありません。此疾病は極めて治癒し難きものでありますけれど、此病氣に罹つたとて甚しく榮養を障碍すると云ふ樣なこともなく、直接生命の危險を來すものではありません。

格魯布性肺炎の經過中には屢〻血痰を出すものであります。患者及び其家族はこれを見て肺結核を發したのではないかと云ふて大きに心配することがありますけれど、格魯布性肺炎の際には血痰を出したからとて其爲に疾病に何等の惡影響を來すものではなく、多くは肺炎が治癒する以前に血痰は自然に止むものでありますから、これに就ては決して心配する必要のないものであります。

心臓瓣膜病患者に於ても屢〻血痰を出すものであります。それは心臓機能障碍の爲に肺臓に鬱血を來しそれによつて血痰を出すものでありますから、其豫後は本病たる心臓病の豫後に關係するものであり

ます。然るに心臓瓣膜病は極めて治癒し難く、殆んど不治の疾患でありますから、それによつて來る喀血も亦容易に治癒せぬ場合が多きものであります。此種の喀血も屢々結核と間違へらるゝものでありますから注意せねばなりません。

代償性の肺出血とは、身體他部の定期性出血が歇止し之に代つて喀血を發するものであります。此種の喀血は決して多く見るものではありませんけれど、時として月經の代りに喀血することがあります。其他痔血又は衄血の代りに喀血することがあると云ふものもありますけれど、それは極めて稀なるものかと思はれます。喀血のあつた場合にそれが、代償性のものであるか否かを決定することは頗る困難でありまして、元來健全なる肺臓を有するものには代償性喀血を來すことなく、月經の代りに喀血を來すものは何れも結核患者であると云ふ説を唱ふる人もあります

神經性の喀血は時々「ヒステリー」患者に見るものでありまして、斯る場合には屢々多量の喀血あるにも拘らず、それが爲に榮養障礙を來さゞることが特有の點であります。

喀血は屢々他の出血と間違へらるゝものでありまして、元來小量の血液を喀痰中に混ずることは、喀血ならざる場合に於ても屢々これを見ることがあります。

咽頭及歯齦等よりの出血を喀血と誤ることがあります。斯る場合に於きましては口腔内に出血すべき箇處があるかなきかと云ふことを充分に檢査し、其他喀痰と血液とがよく混合して居るか、又血液は單に喀痰の外部に附着するに過ぎないものかを見定むることが大切であります。

睡眠中に衄血を發し、それが咽頭又は喉頭に流入し、其爲に咳嗽を發しまして血液を喀出することがありますから、之を喀血と間違へない樣に注意せねばなりません。

喀血と吐血との鑑別は極めて大切であります。吐

血とは凡て胃より血液を吐出するものでありまして、多くは胃潰瘍、胃癌等に來るものであります。此兩者の區別は喀血の際には多くは咳嗽と共に新鮮にして泡沫に富める鮮紅色の血液を喀出するものでありますけれど、吐血の際には一般に胃症狀殊に嘔氣と共に暗赤色の血液を吐出し、其中には多くは食物の碎片を混ずるものであります。然し血液の色はそれが血管を出でゝより口腔より排出せらるゝに至る迄の時間の長短に關係するものでありますから、喀血必ずしも新鮮なる鮮紅色をなすものでもなく、又吐血でも時として鮮紅色の血液を出すこともあります。

喀血に就ては世人一般餘りに悲觀的に過ぐる傾向がありまして、咽頭又は齒齦よりせる小量の出血を見ても直ちに肺結核に罹つたものゝ様に思ひ甚しく絶望的の考へを起す人がありますけれど、それは大に愼むべきことでありまして、喀血は決して世人の考ふる如く左程危險のものではありません。たとへ數回多量の喀血をしたものでありましても、それがよく完全に治癒し、天壽を完ふするものは決して少數ではありません。

喀血した場合には、其治療法として絶對の安靜を保ち、醫師の治療を待つが最適當なる處置であります。此際發熱し、又は烈しき動悸を來したならば、頭部又は心臟部を氷囊で冷すことが緊要であります。

一般に喀血の際に食鹽水の飲用は屢々賞用せられて居ります。それは大なる效果なきまでも決して身體に害あるものではなく、時としては有效に作用することがありますから、之を試むるも亦妙なることと存じます。

寒氣に對する自然の防備

ドクトル　レオポルド、ブルック述

吾々の身體の表面は絶えず種々の刺戟を蒙むつて居りますが、その内でも最も普通で且つ最も強いものは寒冷の影響であります。併しこれに對して自然は吾々に保護装置を與へて居る。而して實際これがその目的に適當した働をするのであります。

先づ第一に身體の一番外側を包むで居る所の皮膚と云ふものが、寒冷の危害を防ぐに重要な働をするもので、大人の皮膚は小兒の皮膚よりも良く發育して居り、男子の皮膚は女子の皮膚よりも強く、勞働者の皮膚は學者の皮膚よりも丈夫で、凡て最も多く外に曝され、使はれる處が最も強くなつて居ります。

衞生學者の中には、寒冷に對する防備器官として皮膚の良く出來て居ることは、人類の先祖と看做されるアダムの皮衣と選む所はない、現今の衞生學上の凡ての要求に適合して居る著物であると迄申す人があります。實際試驗をした成績に據て見ますと、著物を著た人も、裸體の人も體溫を放散することに於ては別に相異がない、只著物を著て居る人に於ては、皮膚に血液が良く流通して溫いが、裸體の人に於ては皮膚血管が收縮する爲めに冷たくなつて居ると云ふだけのことであります。

此の皮膚の各層が、寒冷の作用に對して人を保護するのは、一部はその物理的性質により一部は化學的性質に由るのであります。卽ち一番外側の表皮はその組織學的構造が、種々の刺戟に對抗するに都合好く出來て居りまして、その乾燥して血管も神經も無い組織は、冷水或は冷たい濕つた空氣の侵入に抵抗するには最も適當になつて居ります。是に依て、その下に在る鋭敏な眞皮と云ふものが保護されることは申す迄もないことであります。併しその表皮に少しでも裂隙があれば忽ち右の保護作用は無くな

る、それは目に視えぬ、即ち顯微鏡的の傷であつても既に保護作用は廢せられるのであります。普通の狀態に於きましては、表皮と云ふものは冷水の作用を受けて膨脹するが、液體を通過せしめることはありません。この表皮の不浸透性は、その上に在る所の皮脂に依て強められ、これが又少なからず寒冷の侵入に對して保護することになるのであります。只今申し述べた如き表皮の特性は汗の速かに蒸發するのを防ぎ、最外部の組織附の乾燥するのを妨げるのみならず。表皮を熱の不導體となして、體溫の經濟上に大切な役目を演ずるのであります。それから又彈力性あり、軟かで、神經に乏しい脂肪膜は熱の不導體として、寒冷に對し內部の器官を保護して居ります。

毛髮も亦溫の不導體でありまして、同じく溫度變化に對する外部の防備になつて居ります。殊に動物に於ては、この毛髮は體溫經濟上如何に重要の意味を有つて居るかと云ふことは、種々の季節に於て極めて都合好く適應して變化するのを見れば解かる事であります。即ち人工的に氣候の具合を變化し或は動物を移植する爲めに熱い土地から寒い土地に移すとか、又は反對に寒國から暖國に移しますと、動物の皮毛も亦之に應じて變化致します。例へば「メリノ」緬羊と云ふ毛のむく／＼した種類の緬羊も、亞弗利加のスダンとかトリポリ邊に移すといふと、斯様な熱い氣候では全く羊毛を失つて、滑澤な番犬の様な毛皮になつて了ふ。又これと反對に亞弗利加產の駱駝及び「ドロメダル」と云ふ瘤のある駱駝などを西藏邊の高地に伴れて來ると、やがて房毛のある毛皮になると云ふことであります。人間にも隨分毛深い人があるもので、これも確かに寒さを防ぐに適して居るに相違ありません。例へば臺灣の西蠻人などには殆んど髭を見ませんが、北海道の「アイヌ」は大抵鬚髯を蓄へて居ります。實際旺に發育した髭は、一種の天然の呼吸裝置とも云ふべきものでありまして、髭の豐かな人が、一朝これを剃りますと容易に

風を引く、或は顔に濕疹の樣なものを生じたり致します。倘は鬚髯が寒氣に對して顔面を保護する作用の著しいことは、顔面神經の痲痺が、髭武者の人に比すれば、婦人、少女、小兒或は頰鬚の無い男子に著しく多いと云ふ事實も一つの證據とせられます。

爪と云ふものも、その構造に於ては毛髮に等しいものですが、爪本來の用途の外に、血管や神經に富むで居る手指や足趾の端を寒冷に對して防護すると云ふ役目も持つて居るのであります。

皮膚には汗腺とか皮脂腺とか云ふものが澤山ありまして、一方には分泌に由り、又一方には液體や瓦斯體の吸收に由て感觸に對する防禦として體溫の經濟に影響を及ぼして居ります。氣體の攝取或は排泄に關する作用は、之を皮膚呼吸と稱しまして、その性質に於ては敢て肺臟呼吸と異つたものではありません。卽ち何方もその瓦斯交換は普通の交流作用に基くものであります、故に皮膚も亦一種の呼吸器に數へて、肺の補助器官と看做すことが出來ます。この皮膚の表面から呼出される所の蒸發氣は、その成分に就ては多少不明の所もありますが、兎に角體溫が高まれば著しく其量を增し、體溫が降れば顯かに減ずると云ふことは良く知られて居ります。この呼吸に由て可なり大量の水分が吾々の身體から蒸氣の形で排泄されることは、何か寒冷の物體、例へば鏡のやうなものに此の蒸發氣を凝縮せしめて見れば、大凡その分量が想像されます。

種々の學者の研究した所に據つて見ますと、中等の氣溫で且つ普通の生活條件の下に於て皮膚の表面から呼出される所の水分の量は一日六百六十瓦と計算せられて居ります人工的に身體を暖めれば、皮膚呼吸の作用は高まり、寒冷はこれを弱める。倘ほこの瓦斯交換作用は、血液と外氣とが比較的薄い膜で隔てられて居る處で最も盛に行はれるのであります。

斯樣な理由に依て、皮膚呼吸によりて外に出される瓦斯の量は、身體の表面が血液に富んで居る程多

い譯であります。然るに皮膚の血液の量といふものは、皮膚毛細管の容積に關係し、これは又皮膚の筋肉の收縮狀態並びに心臟の働の強弱等に由るものであります。

外から作用する所の寒氣は、單に皮膚の筋肉を收縮せしめて皮膚に一種の感覺を起し、所謂粟膚になるのみならず特に血管壁の輪狀筋の興奮に由て著しく血管の內腔を狹くし、爲めに皮膚は蒼白となり貧血を來すものであります。溫暖に由ては全くこれと反對の現象が起る。

尙ほ排泄さるゝ皮膚呼吸產物の量は、皮膚呼吸面の廣さ及び各個人の血量にも關係するものでありまして、身體の大さ、體重、年齡又男女等に依て生ずる所の生理的差異は之に由て說明されるのであります。皮膚神經を興奮させる所の作用は、凡て寒冷、溫熱等の刺戟の强さに從て皮膚呼吸產物の上に變化を來すものであります。

皮膚呼吸は、暖かに身體を包めば活潑になり、薄著をすれば弱くなる又空氣の濕度、溫度も著しい影響を及ぼしますし、中樞器官から皮膚の上に傳達さるゝ所の興奮性或は抑鬱性の刺戟も同じく著しい影響を及ぼすものであります。此の如く皮膚呼吸は肺臟呼吸を助けて居ることは勿論ですが、呼出される瓦斯量は外氣溫に關係するものでありますから、皮膚呼吸は體溫を何時も同じに保つと云ふ事に就ても一定の作用を及ぼし、同時に血液より或種類の物質を蒸發せしむるにも與つて力があるのであります。

皮膚から發散する所の著しき水分を抑壓するこになれば、これは健康上、又生命上にも危險を及ぼします。即ち自家中毒と云ふやうな症狀を起して參ります。そこで皮膚全體が呼吸を營む譯でありますが、此の生命にとりて最も大切なる生理的作用の大部分は、多數の毛細管網に圍繞まれ、直接に神經中樞に支配されて居る所の汗腺の作用に歸するのであります。

若し皮膚の表面が、一定時間に發散し得るよりも多量の水蒸氣を出すことになれば、其一部分は汗となつて皮膚の上に溜まり、皮膚呼吸は發汗に變るのであります。と云ふのは、皮膚發散は、皮膚の微量の排泄産物で、汗は只皮膚の機能の高まつた時にのみ生じ、前者は絶えず發散して居るが、後者は時あつて分泌する、一は氣體の狀態になつて居るから目には見えぬが他は液體として顯かに認められると云ふだけの差であります。この汗の分泌は種々の條件に由るものでありまして、特に周圍の空氣が乾燥して居るときには分泌高まり、濕潤して居るときには減じ、又新鮮なる乾燥した空氣の流通或は風に依て催進されるものであります。

稀薄なる空氣中に在ても亦同じく發散は迅速になり、縱令異常に大量の水分が分泌されても、少しも皮膚に汗を止めぬもので、これは高山などに於て認められる所であります

皮膚血管が血液に富めば、それだけ汗の分泌は增すもので、これは周圍の氣溫が高いとか、體內の血壓が高まるとか云ふ場合に起ることで、即ち溫室、溫浴、又衣服の如き溫の傳導の不良なるものを著ると云ふやうな事は、凡て發汗の量を多くする條件となります。

凡て心臟機能を高め、從て血行の速度を早めるやうな原因は、何れも發汗を增すものであります。それで疲勞して居る人が容易に汗をかき、容易に感冒に罹ると云ふことが解かります。

尙ほ皮膚の筋肉が溫の爲めに弛緩する時には發汗を增し、寒冷の爲めに收縮する時には減少して、皮膚の發散する面積は短縮し、血液は外部の層から深部へ逐はれ汗の分泌が妨げられる、これが感冒の起因に關係のある一つの事情であります。

もう一つ玆に述べて置かねばならぬ事は、汗の生ずるのには、素因とも稱すべきものがあつて、各人固有の性質があることであります。即ち或人は非常に速かに多く汗を出し、或人は殆んど汗を出さず又

汗が出難く且つ少しゝか出ないといふ人もあります

汗腺は身體の後面よりも前面の方に多く、又下肢よりも上肢の方に良く發育して居ります　神經病學上では、寒冷などの爲めに起る所の病氣は、皮膚の汗腺に乏しい部分よりも、汗腺に富むで居る部分に起ることが多いやうであります

一體この皮膚呼吸と云ふものは、絶えず極微量の水分を徐ろに發散して、溫を皮膚の表面に保ち、體溫の平衡を維持するのでありますが、殊に急劇なる體溫の減降に出て寒冷に侵されぬやうに保護するものであります

發汗は又周圍の溫度が體溫よりも高くなつた場合に重要な保護手段となるものであります　故に皮膚呼吸及び發汗は體溫の調節を促す所のものであります。加之ならず發汗はこれと同時に一定の排泄物を身體から排除する役目を持て居る、先づ第一に頗る多量の水分、次に血液の鹽分及び尿素と云ふやうな物を排除するのであります　然るに或場合には一定の事情の下に此機能が妨げられることがある、斯樣な場合には他の排泄機能が障碍なしに行はれても、急に汗の分泌が止む爲めに、人體器官にとりては重大なる事が起る、即ち脂肪とか揮發性の酸類などは獨り汗に依て體外に排除されるものであるからであります、

皮膚は一定の物質を體外に排除することに由て、危害を防ぐに大功あることは疑ひのない事でありますが、尚ほ最も重要なる機能の一は、その不滲透性の組織の爲めに、外部から液體の侵入するのを最も外側に於て防ぐことであります、

表皮の一片を水の中に漬けて置きましても、その最も上の方の所謂角質層と云ふ部分だけが水を含みますけれども、その下の部分は軟かい上部の細胞に依て保護され、角質層の剝げない限りは損害を被らずに居ります　斯樣な具合で表皮は水に浸りましても、只上層がふやけるだけで水を吸收することはあ

りません、從つて寒冷な液體のみならず、寒氣も損傷のない表皮に於てはその鋭敏なる神經の末端を刺戟することはないのであります、且つ健全なる表皮は、液體の侵入を容しませんから、表面に近い血管の冷却に對して有力な防禦となるのであります、此の如く皮膚は、正常の狀態に於きましては、その附屬器官と共に、寒冷の危害に對して全く物理學的に防禦作用を營みますが、又一方に於ては神經系統及び循環系統が、急劇なる溫度の變化に對する防備の二大要因となつて平等の體溫を保ち得るのであります。種々の事情の下に於て、體溫の差が甚だ僅かで一定度迄は周圍の溫度に關係なく、略ぼ平等に攝氏の三十六度五分乃至三十七度五分の間に止まり、總ての生理的作用を完全に營むと云ふ事は實に人體の特性とも云ふべきものでありまして、凡そ健康な人間は、何れの人種でも又老若男女を問はず、北極の寒天の下に於ても熱帶の炎熱中に在ても、陸に在ても海に在ても、又粗食する人でも美食家でも、勞働をしても安息しても略ぼ同一體溫を示すものであります。體溫がこの常溫を超過するのは、只異常の狀況の下に平溫を保つことが理學的に不能となつた場合であつて、その異常の關係が止めば體溫は忽ち舊に復するものであります。

但し體溫は前述の範圍に於て一日中にも多少の差を示しまして、その最も高いのは晩の五時から八時の間で、最も低いのは朝の二時から六時の間であります。それから非常に筋肉を働かすときは體溫は暫く昇りますが、完全に休息せしむれば平溫以下になります。之に反して精神の過勞とか、睡眠と覺醒等に由ては體溫に變化を呈しません、食物の攝取に由ては體溫が昇ります。

以上は主として物理學的の作用でありますが、人間並びに一切の生物の中には絶えず化學的作用が行はれて居りまして、その最終の結果として常に熱を生じ、平均體溫を半時間に攝氏の一度、二十四時間に四十八度に達せしむるだけの熱を生じます。これは

到底人間の生活し得ぬ溫度でありますけれども、一方では又絶えず溫を失ひますから、實際には左樣な高溫になることはないのであります。

熱は身體の到る處に生じますが、總ての部分に於て同樣ではありません。筋肉及腺は、熱を作る重なる源で、皮膚は溫放出の重なる場處で、肺や腸も幾分熱を放出することになります。體溫が何れの部分に於ても同一でないことは明かな事で、只深部に在る器官の溫が表面の方に傳はるので、相異つてゐる溫の平衡が保たれるのであります。而して此の偉大なる生理的作用は血液の循環に由て行はれるのであります。生產所から流出する所の血液は、皮膚の表面から還流する所の血液と混合する、他の語を以て言へば、血液は血管の道に依て身體の內部から皮膚の表面に持運ばれ、外氣にその溫の一部分を與へ、自分は冷されて身體の內部へ歸つて行くのであります、斯の如く循環する所の血液は溫度の差を平均し、それから無數の細い緻密な血管を通つて身體の遠い部分に達し而して三十六度五分乃至三十七度五分といふ常溫を保つのであります

外界の狀況は、この正常體溫に一時變化を及ぼすことが出來ますけれども、その作用が止めば、復び普通の體溫となるのであります、それで熱い濕つた空氣の中に於ては、體溫は幾分昇ります。これは內部の體溫を外に出すことが多少困難になり、發生した熱が體內に鬱積するからであります。併し斯樣な場合には、身體は大に發汗してその鬱積を散ずることになります

健康體に及ぼす寒冷の作用に就ては、身體の皮膚より異常に溫を奪ふも、その强さと持續が一定度を超えぬ限りは、身體の內部に於ける體溫は降るものでないと云ふ事は、何れの研究も一致して居る所であります

常溫を保つ上に於ては、尙ほ皮膚血管が大なる影響を及ぼすものでありまして、皮膚に於ける血液の道が廣ければ、それだけ溫を放出することも多く、

狹ければ少ない譯であります。扨て又この血管の擴張或は狹縮は、反射的に働く所の神經の影響を受くるものでありまして、皮膚の感覺神經の興奮に由て皮膚血管が反射的に收縮を起す、而し凡て是等の皮膚感覺神經の中樞は延髓に在るのであります。

平等の體溫を保つ爲めに從て急劇なる冷却に對して重要なる防禦をなすものは、呼吸であります。即ち疾速に呼吸すれば、外部に溫を導き、發散を增しますから、內部の溫を低くすることになる、この體溫の下降は、人體をして迅速なる溫亡失に出來得るだけ對抵するやうに働かせますが、この生理的機轉も矢張感覺神經の功であります

溫放散は皮膚や血管の收縮、呼吸等に依て調節されて、體溫が何時も同一に保たれますけれども、何れの解剖的裝置も適當なる溫發生の調節を缺いては到底體溫を永く同一に保つことは出來ません

溫損失の調節は大體に於て解つて居りますが、溫產出の調節に至ては、到底これを溫損失に由て充分解釋することが困難である。本能により又この作用に就て考慮するに由るは申す迄もないことで、例へば「エスキモ」人が肝油を飲み、一般に寒國の住民は大食し、吾々も寒さを防ぐ爲めに盛に筋肉の運動をし、凍えるときには不隨意的に身振をするなどは、凡て溫亡失に對する不隨意的の防禦と看做すべきものであります。

溫產出の主要なる源泉の一つは筋肉でありまして多くの器官に血液が良く流通することも溫の生成を高めることになります。又寒冷の刺戟が溫の產生を亢進せしめることも事實であります

「ヒステリー」と云ふ病氣

婦人の方で屢々氣が鬱ぐとか焦ら〳〵するとか、兎角氣が變り易く、又頭痛がするとか、處々痺れるなどと云ふ場合には、世間の人は昔は血の道、今は直

ぐ「ヒステリー」と申します。卽ち「ヒステリー」と云ふ病名が甚しく濫用されて居るやうに思はれます併しこれは一方から考へて見れば無理もない譯で、元來「ヒステリー」と云ふ病氣は、その病型が千差萬別で、その病狀も實に變化窮りなき一種の官能性疾患でありますから、醫師と雖も隨分その診斷に苦しみ專門家ですら往々誤診をする位のものでありますから、素人が誤つた診斷を下すのは寧ろ當然の事で、實際「ヒステリー」患者は種々樣々の苦情を訴へるものでありますから、他の病氣の症狀でも偶々二三の神經症狀が併發するときには、容易に「ヒステリー」と稱せられるのも無理はない事であります

これは一寸間違つても別に差支は無さそうに考へられますが、なか／＼そうは參りません、苟も病氣を誤診して宜しい譯はありません。例へば年頃の娘さんが是ぞと認むべき原因も無いのに感情が刺戟性になり、多少熱があるものを「ヒステリー」であらうと云ふて放置して居る中に劇しい腦膜炎を起して終に死亡したといふ例もあり、之とは反對に實際「ヒステリー」患者で只劇しい頭痛を訴ふるものを腦實質の疾患、卽ち腦の腫瘍などと誤つて手術を施されたと云ふやうな例もありますから、妄りに「ヒステリー」呼ばはりをすべきものではありません、それでは眞の「ヒステリー」とは如何なる病氣かと問はれますと、是亦なか／＼難問で、一言に盡すことは不可能でありますが、先づ「ヒステリー」の特徵と稱せられる二三の症狀を擧げて見ます。但しこれに依て普通の人が診斷をなさる爲めではありません、又讀者の或人は直ちに自分の自覺に訴へて、暗示的に是は自分の感覺と能く似て居る或は全く同一であるなどと速斷してはなりません、却つて左樣な輕卒な誤診を防ぐ爲めにもとて申述べるのに過ぎません。

若し「ヒステリー」にも固有の症狀があつて、他の病氣には決して現はれぬと云ふやうなものがあれば、診斷は誠に容易で且つ確實でありますが、生憎この「ヒステリー」には左樣な固有の症狀さては無

い、殆んど如何なる症狀でも起らぬとは限らぬので困るのであります。それで決して二三の症狀を捕へて「ヒステリー」と云ふ譯には參りません種々の症候を一纏めにして見て、その中の最も多く「ヒステリー」に現はれるものを一群として判斷する。又「ヒステリー」の型を診定し、その體質、その病氣の經過を見て診斷を下すことになるのであります。其中でも比較的「ヒステリー」に特有と認められて居る身體症狀と精神症狀とがあります。即ち精神症狀としては感情が變化し易く、意識も動搖し易く、暗示性に富むで居る、即ち梅干と言へば直ちに唾液が出る、針と言へば足蹠がチクリとすると云つた調子であります。身體症狀にも所謂「ヒステリー」性特徴と稱せられる左の如きものがあります。

（一）皮膚感覺の特徵　全身、半身或は一局部に感覺の脫失、減退又は過敏症等があつてそれが時によりて種々に變はる、即ち或時は非常に過敏であつた處が他の時には全く感覺が無いと云ふやうに變化する、又眼の方に於ても能く視えたり視えなくなつたりする。殊に視野と云ふて物を見る界が狹くなつたり、半分しか視えなくなつたりする。聽覺、嗅覺、味覺にも異常を來して非常に耳が遠くなつたり、人の厭やがる味や臭を好んだりすることがあります

（二）運動性の特徵としては、痲痺、拘攣、痙攣、振顫等の症狀が起つて運動が思ふやうに出來なくなる、殊に言語に必要な筋肉が痙攣を起して吃吶を來し又顏が歪み、眼瞼が開かなくなつたり斜視を起したり、頸が斜に曲つたり、上下肢が拘攣て奇妙な運動をしたり致します。

「ヒステリー」性痙攣と云ふのは癲癇の樣に痙攣を起したり失神したりするものでありますが、又不隨意に身體を捻つたり反らしたり振つたり樣々の運動を起すこともあります。尙ほ斯樣な運動障碍は隨意筋にのみ起るとは限らず、心臟、呼吸器又消化器等の筋肉にも起ることがありまして、それが爲めに患者は顏面が蒼白になり、口脣などが紫色になり、或は浮

暈を起したり、動悸が劇しく呼吸が急しくなつたりすることがあり、又下痢や便祕を來し、或は「ヒステリー」球と稱して腹の中を球が處々に轉げて歩くやうに感じたり、腹が張つたりすることがあり、瞳孔が据つてしまふやうなこともあります。又無暗に唾液が出たり、噯氣をしたり、汗を出したり、體溫が昇つたりするやうなこともあります。

(三)精神症狀は前にも一寸申しましたやうに感情の變じ易いことが特徴で、激する時には忽ち本心を失ひ、朦朧狀態と云ふやうな風になるものであります。これにもその程度、經過の長短、症狀の單純なると複雜なると幾多の差別がありまして、種々の幻覺が起つて、有りもしないものが視えたり聞えたりするやうの事もあり、躁ぎ出す者もあり、或は茫然として人が物を問ふても答ふることをしなくなつたり致します。甚しきは全く睡眠してゐる者の如く、死んだ人の如き有樣を呈することもあります。又夢中遊行と申しまして、患者は理由もなく外出して處處方々を徘徊し、自分は全く知らぬやうなものもあります。

右の如く意識溷濁が甚しくない「ヒステリー」性の精神變調で、單に感情の變化のみ著しい者に於きましては、只喜怒哀樂の情が異常に轉變し易いものがあり、又甚しき興奮狀態に陷るものがあり、何時も同一の氣分が續いて、心配性とか氣鬱性とか云はれるものもあります。或時は又幻覺や妄想を起して考違ひをしたり、非常に我儘で意地張りになつたり、虛榮心が昂じて慾望が强くなり、虛言を言ふたり、不道德なことをする癖を生ずることが尠なくありません 元來能力の足りないやうな者になりますと、僅かの原因から烈しい感動を起して、その極、突然自殺をしたり、竊盜をしたり、放火をしたりするものがあります。

以上は大體「ヒステリー」に屢々現はれる症狀としてありますけれども、その一つ二つの症狀があるからと云ふて直ちに「ヒステリー」と稱することは出來

ません、矢張その原因、經過を觀察して右に擧げたやうな多數の症候群が揃ひ、「ヒステリー」に似た他の病氣例へば癲癇とか早發性癡呆などゝ云ふ病氣ではないと云ふことを明かにしなければ濫りに「ヒステリー」と呼ぶは不都合な事であります。

育兒

疫痢に就て

昨今東京には、ぽつ〳〵疫痢が流行して、可愛い盛りの而かも强壯に育つて來た子供が突然死亡するのが少なくないと云ふことであります。實際疫痢といふ病氣は夏から秋にかけて多い、即ち六七月から始まつて十月頃迄猛威を逞しうするもので、二三歳から六七歳の小兒を侵かし、何方かと云へば寧ろ平素强壯な小兒を襲ふ傾があり、一度これに罹れば大抵一日長くも二日位で死亡するのが御定りで、實に危險千萬な病氣であります。依て此際少しく疫痢と云ふものゝ性質をお話して措くのも無益ではあるまいと思ひます。

先づ疫痢は何んな風に起つて來るかと云ふことを概略お話致しますと、通常今迄活潑に遊んで居つた健康の小兒が、何と云ふ譯もなく元氣が無なり、遊戯をやめてぐんにやりしてお母樣の膝枕をしたり横になつて寢たり致します。此時何だか妙だと思ふて額に手をあてゝ見ると多少熱がある。それから二三時間もたつ中に熱は段々昇つて三十九度位になり何であらうかと思ふて居る中に便通がある。今迄毎日一回づゝ規則正しく便通のあつた子供が時ならずして大量の軟便を排泄する。大抵一回であるが稍ゝ少量に二三回排泄することもある、而してその大便の中には不消化物を混じ、又は惡臭があり或は少量の粘液を混じて居る。尚は腹痛を伴ひ、嘔吐を催し、

稀に頭痛を訴ふることもあります。

これが先づ最初の病狀でありますが、それから五六時間もたちますと、體溫は漸次昇つて四十度以上に達し、前には殆んど通常の軟便であつたものが今度は粘液便となり、黃色或は綠色を帶びて居りますが、往々少量の血液や膿のやうなものを混じて來ることもあります。而して此の時期になりますと小兒は痙攣を起し、精神は朦朧となり、次で昏睡狀態に陷り、漸次心臟痲痹を起して遂に死亡するのであります。

この發病から死に至る迄の時間は、早きは十二時間、遲くも四十八時間、平均二十四時間前後で、四十八時間以上持ちこらへたものは死を免れると言はれて居ります。而してその治癒する場合には、熱は降り、痙攣も止み、精神も明かになり、心臟の力も強くなり、下痢は止み、食慾が出て、二三日或は五六日で、さしもの大病が全治して仕舞ふのであります。

疫痢の症狀及び經過は大略右の如きものでありますが、その原因は何かと申しますと、これには種々の議論も有ることでありますけれども、大きく申せば、大腸菌族に出て起る一種特有の小兒傳染病であると言ふて宜しからうと思ふのであります。病原菌はそれに致しましても、病原菌だけで病氣の起るものではありません、それには又種々の條件がなければならぬ譯であります。今その素因とも云ふべきものに就て考へて見ますと、第一に土地の關係でありますが、本病は關東に稀で關西に多く流行し、名古屋、福岡、熊本は最も多く流行する。東京、京都、四國邊にも屢々小流行を來し、其他の地方にも散在性に發生致しまして、兎に角盛に流行する處と餘り流行しない土地とがある、又海に面した處に多いと言はれて居りますから、理由は能く解りませんけれども土地の關係あることは確かであります　氣候も槪して暖かい處に多く、東北のやうな寒い處には餘り無いのであります。季節も冬期には極めて稀で、

何時でも夏の初から初秋にかけて流行するのが例である、即ち六月から急に增加し、十月になると急に減少するのを見るのであります。年齢は何うかと申しますと、滿二年乃至六年未滿のものに最も多く、二年未滿七年以上になると急にその數を減じ、大人には殆んど見ない。男女性を比較すると男兒の方が稍〻多いやうで、體質は寧ろ體格榮養の良い小兒が侵されることが多いやうに見えます

次に誘因とも認むべきものは不消化物及び過食でありまして、是は季節の關係もありませうが、疫痢に罹つた小兒の便を檢査致しますと、大抵果物を食べて居る、桃、柿、梨、バナヽなどの消化しない物を認めることが多い。果物と限つた譯でもありませんが兎に角種々の不消化性の物を食べて居る場合が多いのであります。

最後に豫防及び治療上の注意を申しますと、第一に前に述べた誘因に鑑みて小兒には不消化物を與へぬやうに、又過食せしめぬやうにすることが肝要であります。特に注意すべきは外出先でありまして、何程家でだけ氣をつけましても外に出て不攝生をすれば何にもなりません。本病は傳染しますから疫痢患者のある家には小兒を遊びにやらぬやうに、若し家族の中に發生したならば直ちに隔離し、消毒しなければなりません。尙は流行地を避けて轉地をすれば最も安全であります。併し元來本病の病原菌は平生自分の腸内に居つて、或機會に逢ふて病原となるらしいのですから、何れにしても飮食物を攝生して腸を害さぬやうに氣をつけることが一番肝腎な事であります。

次に治療上最も大切なことは一刻も早く病氣に氣がつくと云ふことであります。これ程の重病でありますから、少しも異常なしに直ちに危篤に陷ると云ふ筈はない。經過は非常に急劇で突然發病するやうに見えますけれども、よく注意すれば必ず多少熱があるとか氣分が惡いとか云ふことがあり、それから前述の如き軟便を排泄する、此時には一刻も猶豫せ

す治療を加へなければなりません、早くさへ治療が屆けば可なり重症のものでも治りますが、痙攣を起したり、嗜眠狀態を呈するやうになつては先づ殆んど助からぬものと思はなければなりません。下剤をかけたり灌腸をしたり、種々の注射をするとか云ふやうな治療法は全く醫師の仕事でありますから、これは申上げる必要はありますまい

初めての乳の與へ方

胎內に居る間は小兒は何で育てられて居るかといへば、申すまでもなく血液で育てられて居るのであります

直接に母親の血液が小兒の體內へ流れ込むのではないが兎角血液で育てられてるといつてよろしい。今小兒が生れるともう母親の體からは何も送つてくれません、昨日と今日とで僅か一日の差でありますが小兒の境遇には大變な相違であります。そこで小兒に飲ます物は何がよいかと申しますと昨日まで胎內で血液で育てられて居たのですから成るべく血液に近いものがよいことは分り切つたことです、しかし人間の血液をとつて飲ます譯には行かない、動物卽ち牛や猫の血液を飲すことは固よりよくない、然らば何がよからうと尋ねますと遠くをさがすまでもない、生みの母親の乳房から出る乳、これが何より一番よいのであります。

何故之が一番よいかといふに最も血液に近いからである、母親が小兒を產んでから凡そ一週間程の間にでる乳はこれを初乳と名づけまして、それ以後に出る乳とは大變相違してをります　一寸見たゞけでも黃ろみが深く粘り氣がつよい、これが血液と非常によく似て居るので一名白い血液とよんで居るほどであります。其中に含んで居る物も悉く生れたての小兒に入用で、しかも消化し易いものばかり、其他種々な病氣を防ぐ物も母親の身體から初乳の中へ出て來ます、「胎毒下し」やマクリの代りをして小兒に

よい加減の通じをつける物も亦此初乳の中にありますから、初めから母親の此初乳さへ飲ましをけば一胎毒下し」マクリはいらないのであります。一週間過ぎてからでる乳は見た所牛乳と同じやうな白い乳で初乳に對してこの方は永久乳といひます、初乳と永久乳との委しい相違の點はこゝには略します。

生れて二十四時間たちましたら、乳房を小兒の口へふれさせますと、小兒は直ぐに吸ひつくのが普通であります、若し吸ひ附きません時は初め母親が輕く乳を搾りますと初乳は出てきまして露のやうに乳房の所へたまりますから其まゝ子供の脣へあてますと必ず吸ひます。一體小兒は生れながらにして稍々な事を知つてるもので臭味のあるなし、味のよしあし、熱い冷い、痛いと痛くないなどはよく判つて居るが殊に吸ふ事はよく知つてをります、其證據には小兒の頰でも脣でも指で以て一寸ふれますと、直ぐ口を持つてきて何でもかまはず吸ひますのでもわかります、此吸ふといふ事を知らないのは、生れながらの白痴で脳に異狀がある赤兒に定まつて居ります。

此初乳を凡そ十分程吸はせましたら小兒は泣いてもかまひませんから、乳房からお離しなさい、それから三時間程たちました時又乳房を口へあてますと又吸ひます、こんな具合で一日に七回十分間程づゝ吸はすのであります。每回の間は凡そ三時間置くがよろしい夜分は四時間隔で充分です、それ故朝は五時、八時、十一時、午後は二時、五時、夜分は九時と一時に飲ませればよい、つまり晝夜で七回、十分あてでよろしい、尤も場合によつては初めの一ヶ月は二時間置きに一日八回與へてもよろしい

百日咳及び實扶的里亞の看護法

◎百日咳は今日の所未だ病原菌も其の特效藥と云ふべきものも發見せられず、色々な藥はありますけれ

ども必ず癒るといふ事は云ませぬ、いくらか效くこいふ位でありましてその名稱の如く百日間も咳が續くことがあります、咳のために自然身體の諸方に影響を及ぼしまして、最も多く來るのは肺炎でありますから百日咳は醫者に罹つても治療方法はないから捨て置くといふのはよくありませぬ、根治策はないにしても、輕くしてその他の併發症を避ける工夫をしなければなりませんから、なるたけ醫者にかゝつて、よく攝生を守り外出などをさせないやう、寒い室ならば室を溫め、榮養を專らとし、消化のよいものを攝らせ、咳のために吐く事がありますから一度に澤山やれませんから咳の止まつた折を見て一日幾度にも食物をとらせます、長い病氣ですから入浴は熱さへなければさせてもよろしい、入浴したら決して外へ出さないやうに直ぐ寢かすがよい、かういふ看護法をとつたならば他の併發症は避けて輕く經過するものであります、百日咳は空氣傳染でありますから、一人子供が罹たならば健康な子供はほかに避けさせねばなりませぬ、平常身體を丈夫にしてをけば癒りも早い、若し肺炎を發したら肺炎の手當をするのであります、生れてから五歲位までの子供が一番罹り易く、それより大きくなると、めつたに罹りませぬから、その間に注意して、この患者に接近させないやうにするのが肝要であります。

●●●實扶垤利亞は、大人も罹る事がありますが、主に子供に多い病氣で、その發疹が眼につくことも或は皮膚につくこともありますが、一般實扶垤利亞は咽喉につくのを稱して居ります、初は風邪を引いたやうな徵候でありまして、それから俄かに熱が三十八度、三十九度となります、小さい小兒ですと口をききませんから分りませんが、少し大きい子供は苦痛を訴へます、それが四、五日たつと咽喉の奥に進んで聲が嗄れて來ます、それからしは嗄れた咳がでゝ呼吸が苦しく呼氣が臭くなります、今では幸ひに血淸が出來て居りますから、これを注射すれば先づ病氣を食止めることが出來ますが、手遲れにしまして

はこの注射も何の效を奏しませぬから、實扶垤利亞と氣付く頃では既に遲く、風邪の少しく重いのではあるまいかといふ時に咽喉を見ますと、白い斑點がつき、咽喉が腫れてをります、これが實扶垤利亞の特徵でありますから、これを發見したらこの時期に血清注射をしなければなりませぬ、又實扶垤利亞が咽喉の奧の方の聲門といふ所につきますのを格魯布卽ち昔はこれを馬脾風といひまして、急に四十度位の熱が出て、呼吸が非常に困難になり、衝突狀のしは嗄た咳がでゝきます。

手當は咽喉に氷をあて氷枕をさせて吸入をかけます、その度數は何回でも多いほどよい、さうして度度含嗽をさせる、食事は大して嚴重にしませんでも本人が望むものであればひどく不消化物でなければ與へて差支ありませぬ、脈が惡るくなつたりする時は心臟部を冷やさなければなりません、最も注意を要するのは、恢復期に腎臟を冒すことがありますから、恢復期になつて餘り運動を激しくせぬやうにし、またさうでなくとも腎臟を冒すことがありますから、熱も下るし咽喉はよいと思つても尙ほ一週間位は隔日に醫者に尿の檢査をして貰ひ一週間もたつて何んともなければ入浴させてもよう御座います、猶傳染易い病氣ですから他の子供を隔てた所にうつして看護するかさもなくば早速入院させるのがよろしいのであります。

謹告

○前號の講演につき

本誌前號に掲載されたる「人と自然」と題せる高島先生の講演は當時の筆記甚しく不完全なりし上、種々の事情の爲め演者の校閲を得るの暇なく、已むを得ずそのまゝ掲載したるに、高島先生より人名、地名、其他に於て幾多の誤あり、甚だ迷惑に感ぜらるゝ旨御叱正ありたるにつき、右は單に三月例會に於ける概況を報じたるものと看做され度く、講演筆記中の誤謬は全く記者の責任に在り、これ講演者及び讀者諸姉に對し深く其罪を謝し諒恕を乞ふ所なり。

胡椒	少々	〇	一

味噌は擂る程滋養あり且經濟である、だしは煮干（煮干を契つて擂つて粉にした物）元は成可く斜かひに切つて青いのを望む人は列つた後鹽をふつてねかして水氣を去つた後沺一滴の中で一寸いつてから入れる、沸立つた汁には煮干の爲に赤い泡が立つから取りすてる。

雜錄

經濟的榮養料理

醫學博士佐伯矩氏は榮養研究所に於て理財的榮養講習會を開き、實際生活上に於て最も廉價にして完全なる榮養を取り得べき獻立及び料理法を講ぜられたが、時節柄極めて必要の事であるから、東京朝日新聞に掲載されたものを一括して茲に紹介することに致しました。

獻立は左の通りで一人一日五錢である、これは五錢の外であるが茄子の中味をくりぬいて牛の血と馬鈴薯と「メリケン」粉とを之に混ぜ再び茄子につめて詰め口を一寸油でいためてお湯から煮て十分軟らかになつた時醬油を加へると牛の血料理が出來る、左は皆材料五人分。

（朝）　莢隱元味噌汁

		蛋	溫量
隱元	二十匁	二一	二五
味噌	五十匁	二三	三〇四
煮干	一匁	一	二

（晝）　ひじき生姜煮

ひじき	十五匁	六六	一六
鰊	二十匁	五二	三一五
醬油	十匁	三	二〇
酒	二匁	—	八
砂糖	二匁	〇	三六
生姜	五匁	—	一二

水に浸したひじきは被る程の水で煮て其半分の水をすて、鰊は逆に庖刀を使つて皮の方を上にして成可く薄くそぎひじきの中に入れ酒と砂糖とを加へ後醬油を入れて煮る、生姜は鰊の臭味を去る爲だから成可く細く纎にしてひじきが煮上つてから入れる、鰊は灰汁か白汁に浸けた物。

（夕）　五目刺身

魚肉	二十匁	一三	八六
大根	五十匁	—	八五
蒟蒻	三十匁	一	一五
生姜	三匁	○	七
蕃椒	一匁	—	四
らつきよ	三匁	○	—
紫蘇	一匁	—	四
胡麻	四匁	—	三九
鹽	二匁	○	—
酢	二匁	○	—
(夕) 米摘み入れ澄汁			
魚肉	十匁	六	四三
山芋	十五匁	三	五〇
醤油	十匁	三	二〇
煮出し(骨利川)		—	—
鹽	少々	—	—

魚はいゝ魚だつたら普通の刺身にする併し一日五錢を念頭に置いては魚の普通の身で出來ない時もあるから其時は頭の肉を四處から取つて刺身に作る大根は纖にして水に放し採んで布巾にて水氣を去り油で一寸いためる、蕃椒らつきよは輪切りにし生姜は針にして紫蘇は細く切り、胡麻と鹽と酢でこいた物を作り皿に盛る時は大根を下に敷いて其他の物は皆其上に色こりよく盛り合せる。

蒟蒻は絲か白たきならば用ひにより之を一寸位に切り鹽で

夕食第二の米摘み入れは魚の骨の間から取つた肉をすり身にし山芋のおろしたのを混ぜてすり箸で小さく(米粒程に)切り取つて皿或は鉢の水に放し別に煮汁を作つて其中に掬ひ入れる、此の對手には大根の莖の中一番中心になつてる若芽を鹽湯で茹でゝ用ひる。

注意　魚の骨を煮出しに利用するには先五六十度の微温熱から入れ。

一旦煮立て沸騰したら火をとめて泡をすくふ、之は汁の濃厚にならない爲めで之を濃厚にしようには水から骨を煮るのである。

魚はいゝ處では一切八錢もして使へないから頭や骨をからして利川するのである。

一日一人五錢の惣菜とすれば隨分心を用ひて無駄な處を出さぬよう彼是れを上手に使ふ工夫をしなければならない、

今日の魚にしても立派な切身を使つては迚も五錢では上らない、三錢で頭を買つて取れる丈けの肉をこつて使つた上に骨は澄汁のたしにする、煮干のだし昆布のだしも鰹節のだしよりは非常に經濟でしかも味ひには違ひがない、大根の葉、南瓜の心皆捨てる處はないと一戸女史は此點に最も力を入れて敎へてゐた。

(朝) 松露豆腐澄汁

		蛋	温
豆腐	四十匁	一〇、一	九一
「メリケン」粉	五匁	二、一	六一
胡麻	六匁	四、七	一四二
生姜	少々	—	—
昆布	六匁	一、五	五〇
葱	二匁	〇、一	二

松露豆腐といへば大小によらず松露の形にするので豆腐半分位をよく布巾にて絞り裏漉に掛てメリケン粉を混ぜ松露の形に丸めて胡麻油にていため目笊にとりて沸湯をよくかけ油を抜き葱は成可く斜違に切つて煮汁は昆布にてとりすり生姜を添て出す。

(晝) 馬鈴薯靑和へ

馬鈴薯	九匁	五、一	三〇
枝豆(正味)	卅匁	九、三	一一四
砂糖	三匁	〇	五一八
鹽	一匁五分	〇	〇

馬鈴薯は芽の出る頃には其芽にソラチンと稱へる毒があるから注意して其芽を去り拍子木に切り枝豆は莢より彈いて鹽をふり茹でゝ擂り砂糖及鹽を加へて醬を和へる。

(夕) 鳴戸卷

豆腐	百二十匁	三〇、四	二七一
魚肉	三十匁	一九、五	一二九
海苔	四枚	—	—
味噌	二十匁	九、五	一二一
柚子	少々	—	—
砂糖	二匁	—	三四五
鹽	少々	—	—

(夕) 魚の骨利用澄汁

葱	九匁	〇、五	九
醬油	六匁	一、八	一、二
鹽	三匁	—	—

豆腐は朝と同じくよく絞りて裏漉にかけ、魚肉はすつて豆腐とよく混ぜ海苔をやきて半分にし俎の上にて右の豆腐と魚肉とを一分位の厚さにのべ巻きて少量の油の上にて轉がし(海苔のはじけぬ內に)小鉢に盛りて柚子味噌をかける、柚子は皮を細かく切りて摺り味噌とすり合せ砂糖鹽にて味をつける。

前に川ひたる魚肉は魚の頭から取つて其骨は澄汁のだしとして葱を入れ供す、但し骨は水より煮る時は濃厚となり五六十度の微溫湯よりすれば淡白となる、茵に魚許りでなく昆布だし煮干だしも同樣である。

講習第三日はまづ佐伯博士の消化器個々の働きに關する講話があつて一日の獻立に取寬つた、此外に其日使つた材料の廢物を以て作つた料理と講師一戸女史の如何にして安い醤油を旨く喰べられるか換言すれば四十錢の醤油を五十錢の價格丈けに味はれるかと言ふのであつて女史は之が爲め幾年かの苦心を以て各地の醤油醸造家を歷訪し且つ試驗管にかけて分析した結果の實驗である猶ほ女史は食物に廢物なしとの主張から冬瓜の綿と皮とを巧みに且味ひよく調理して見せた。

(朝)　甘藍味噌汁

		蛋	溫
甘藍	二十匁	二、二	三六
辛子	少々	—	—
味噌	五十匁	二三、六	三〇四

之は何でもないキャベツの味噌汁であるが特色とする處はだしが使つてない事で甘藍は甘味の豐かなもの從つてダシがなくとも結構食べられる若し之に魚のダシを用ふるとつまり野菜の甘藍と適合しない結局之はダシぬきにして辛子を少々加へて調味すると味ひが一際進むのである、甘藍は纎に切り初めから汁の中に入れ辛子は辛子油の出る迄よくかく。

(晝)　冬瓜のあんかけ

冬瓜	百匁	一	三一
煮干	二匁	二、二	一三
酒	五匁	—	二〇
醤油	十匁	三	二〇
片栗粉	四匁	—	五〇

冬瓜は皮を成るべく薄くとり身をそぎ身にし極く少量の水を以て煮干を入れ煮て沸立つた時酒と醤酒と順次に入れ再

び沸立たせて片栗粉を入れる、偖て冬瓜の綿は翌日迄置いて何ともなければお汁の實になるし或は直ぐに鹽をふりかけ片栗粉にまぶして澄汁の實にまたは茹で上げて酢の物の對手にする甚だ妙である、次に皮は纎にしてザット湯煮をした物を佃煮にする、之も亦妙である。

（夕二種）するめ牛蒡の甘煮

するめ	十匁	二六、七	一二一
牛蒡	三十匁	一、六	一二七
醤油	六匁	一、八	一二
砂糖	二匁	〇	三六
酒	五匁	—	二〇
片栗粉	四匁	〇	五〇

冷豆腐

豆腐	百匁	三一、二	二七九
味噌漬瓜	五匁	〇六	一七
生姜	三匁	—	七
シソ實	少々	—	—
南京豆	三匁	三、二	六五
味噌	一匁	五	六一

するめは刻み鋏にてよろし、牛蒡は水の中にさゝかいて又は纎にしてあくをぬき茹でゝから酒及砂糖を入れ後するめを入れて次に醤油を加へる最後に片栗粉をといて入れるのであるが注意しないと二タ品が皆玉のやうにもつれ合ふ

豆腐は例により奴に切り置く、味噌漬瓜は纎に打ち生姜は微塵に切つて南京豆は庖刀にて切つたのを擂鉢で更に細かくすり豆腐を段に盛り上げた皿の上に南京豆其上に生姜と置き左手の前に味噌漬瓜とシソの實とをならべて置く、之は支那風で見た所も却々美しい。

醤油に就て一戸女史は左の如く語つた、醤油醸造家は五種に分けて醤油を作り最上、極上、上物、並上、並と稱へて最上は純粋の絞り切り極上は其次ぎを絞る、上物とは番水と稱へて二番物を三升純粋物を七升、並上とは之を半々に混ぜ並物となると番水七升純物三升の割合となるが、加味する時は又最上には一石に付味淋五升白砂糖一貫目、極上は味淋二升白砂糖五百目、次の上物及並上には赤砂糖五百匁だけ最後の並品に至つては赤砂糖さへも加へない此他に種々加味調合するのである、さて之を價格以上に味ふとならば前述べた醸造の時の分量に準じて二パーセントの味淋と砂

糖咖啡七半分割合で加へればよいのである。

十八貫二百目の體量を有つてる獨逸人が戰前には三千五十五「コロリー」を攝つてゐたのが今では中位の人で劇務に當らない人の「カロリー」が千三百五十に減じた之を平均體量十三貫五百しか有つてゐない日本人とすれば、九百七十の「カロリー」で足りる譯である併も一日五錢の惣菜で三合五勺の米を攝るとして殆ど二千「カロリー」攝れるわけである、國民各習慣性標準食を有つてゐる之に次いで學者の方には保健食の標準がある、チツデンテン先生は學者の唱へる標準食をもう一層引下げる事を唱道されたが今や其れが實現されてゐると佐伯博士は言つた。

(朝)　あられ豆腐

茄子	三四匁	一、三	二三
味噌	五十匁	二三、六	三〇〇
煮干	一匁五分	一、七	一〇二

茄子は皮の儘にて細かくあられに切り水に放しておく事、味噌汁は煮出から茄子をいれ一度沸騰させればよい。

(晝)　卵の花煎り

卵の花	六十匁	八、五	一一三
胡蘿蔔	二十匁	一、〇	二〇
豚肉	五匁	二、六	六一
葱	九匁	〇、五	九
味噌	三十匁	一四、一	一八〇

卵の花は手輕に惣菜用として用ふるのであるから捨らずに川ひろ、此場合醤油で味を附けないのは味噌と豚とはよく適合して味の調和もいゝし溫量にも適ふからで、豚は晝と晩との使用に小間切れを買つて惡い部分を卵の花の中に使ふ、最初に胡蘿蔔の汚ない處を去つて皮の儘纎に切り葱と一緒に豚の脂肉を強火でとかした中でいため卵の花をいれ、肉は小さく切つて之も脂肉のとかした中で別にいため味噌の柔かくとかした中に入れ上下に掻き廻して煮て其中に前の野菜及卵の花を入れる。

(夕)　豚の吉野打

豚肉	十五匁	八、〇	一八四
片栗粉	五匁	三	六三
昆布	六匁	一、五	五〇
間引菜	十匁	〇、八	四
生姜	少々	—	—

醬油	十匁	八	二〇
葱	二匁	一	二

小間切肉の甘煮

豚肉	三十匁	一六、二	三六七
馬鈴薯	六十匁	三五	二〇〇
胡蘿蔔	三十匁	一、五	四五
醬油	十匁	三	二〇
砂糖	五匁	〇	八六
鹽		〇	〇

醬に除け置いた豚の赤肉に微塵にした生姜をふりかけ葛粉をまぶして俎の上にて平手にて打ち、昆布のだしにて汁を作り其中に肉と葱を入れ二度沸騰させつまみ菜は鹽を入れて茹で水に取り置き汁を椀に盛る前に入れおく、此汁の中に鹽を少々加へれば味ひ幾分進む凡て豚の臭みは生姜と葱にてぬき前日の如き魚の臭味は柚子一滴滴せば消える。

次に甘煮は豚を横口に切つて砂糖及鹽と最後に醬油を加へて煮上がけたらば乳切にしたる馬鈴薯と胡蘿蔔とを前に茹で置きて豚の煮汁にて煮上げる、醬は頽れぬ程に茹でるを度とす。

今日は干魣開き魣のお料理、歯の無い老人では堅くて到底ーといふ勿れ、やり方一つではお刺身にさへなる一片參錢の干魣は五人分の吸物と酢の物に使て猶ほ餘る一戸女史の細心の研究は終に干物を以てよく刺身を作ることさへいふ干魣は前後から灰汁を水一升に對する一勺の割合にして浸け置くと翌日は觸ると獨りでに身がそぐ様に離れる、高野豆腐は灰汁を加へた水に二分間浸けると生の豆腐程軟らかになる、今迄經驗でやり來つた事が此處へ來ると學理が立派についてお料理にも權威が出る。

(朝) 干瓢味噌汁

干瓢	二匁	〇、六	二〇、八
味噌	五十匁	一三、六	三〇、四
昆布	六匁	一、五	四九、六
生姜	少々	―	―

干瓢 微温湯に浸け鹽で揉んで洗ひ一分位て切りに汁の實とするだしは昆布でやくみは生姜。

(晝) 南瓜の翁煮

南瓜	二百匁	五、四	二二一、三
胡麻	八匁	六、三	一八九、五

醬油	十匁	三	二〇
砂糖	三匁	〇	｜
鹽	少々	〇	〇

南瓜は最初よく水洗ひして適宜に切りよき程に水を入れて茄で軟らかになりたる處へ砂糖を入れ暫時煮てから醬油を加へる鹽は風味をよくする爲め少々加へ別に白胡麻を熬りて擂り煮上りたる南瓜の上にかけ煮立てるご白胡麻は南瓜の上に浮いて白く掛る。

(タ) 干鱈の吸物

干鱈	五匁	三、五	一五
片栗粉	五匁	〇	六三
茗荷	少々	｜	｜
醬油	五匁	一、五	一〇
鹽	一匁	〇	〇
昆布	六匁	一、五	四九、六
ゆば	二十匁	三九、六	二九、五

干鱈の酢の物

干鱈	十五匁	一〇、七	四五
大根	三十匁	〇、八	二〇
酢	五匁	｜	〇九
味噌	四匁	｜	三七、七
鹽	一匁	〇	〇
砂糖	少々	｜	｜

前に言ふ通り干鱈を一ト晩灰汁水に浸け置き取出し 肉をそぎ片栗粉をまぶして俎の上によく平らに打ち、昆布だしを用ひて作りたる澄汁の中に入れ沸騰させる、ゆばは炭のころ火の上にかざしてあぶり燒けた處を(こげぬ位)濡布巾につゝみて濕らせ小口より細引き鱈の對手こする、茗荷は細くして香味にそへる。

干鱈の酢の物には右の鱈を指の、尖端か俎の上にて庖丁にて揉むご纖維は一本々々に離れる、次に大根は極く細く纖にして水に放ち淡く食料紅を溶かして薄桃色こし皿に盛り其上に白き身の鱈を載せ三杯酢にて供す。

(注意)　盗の翁煮に白胡麻を用ひたれごこれは西瓜又は南瓜の種を炮烙にて煎り皮をむいて擂つて胡麻の代用すれば極めて妙。

又南瓜の中の綿は種こ別けて水一升に鹽二匁の割の鹽水にて洗ひ水を切りメリケン粉をまぶして揚げ物にするも

赤抄

次に鱈は灰汁水より取出したる後急ぐ時は微温湯にてさもなくば水に二時間程浸ければ灰汁の臭味は去れる。

佐伯博士は安價生活の秘法として食物をよく噛んで嚥下することを力説された、それは唾液が澱粉質を消化するに最も必要であつて噛めば噛む程唾は餘計に出て來る、此唾の中には澱粉を消化するヂアスターゼを多く含んでゐるので若し食べ過ぎた時には堅い肉のやうな物をよく噛むか酸菓抔もよい、果物野菜の中にはヂヤスターゼが澤山あるから食後果物を喰べるもよい、お茶漬其他汁かけ飯にして胃の腑へ流し込むのは消化に大害があるとの事である。

(朝) 枝豆汁

枝　豆　十匁
昆　布　六匁
味　噌　五十匁

枝豆は正味十匁で大豆を以て代用さするもよく若し大豆ならば前夜から水に浸けて用ふる、豆は擂鉢の中にて豆のにげぬ樣盃に一杯位の水を入れてすり味噌汁の沸立つた中に入れ一度沸立上りたらば杓子で一度かへした後に下す煮過ぎてはおからのやうになる、昆布のだしは汁をあつさりと作る爲めに沸立つたら直ぐに昆布を取出し、取出した昆布はお晝のお料理に二度の役をする。

(晝) 養老牛蒡

牛　蒡　五十匁
胡　麻　六匁
醤　油　六匁
鹽　少々
砂　糖　二匁

牛蒡はこそげて一寸乃至一寸五分の長さに切て水に放してあくぬきをし竪に四つ五つに切り朝使つた昆布を細引いて之と一緒にザツト湯煮して醤油だけを加へる胡麻は油の出る迄よく擂つて(無論煎つた後)鹽砂糖を加へ前の牛蒡にかける、之は支那風の物で牛蒡と胡麻を食べれば長壽をすると言ひ傳へらるゝより養老と名がついたとか。

(夕) 乾鱈の揚物

乾　鱈　十匁
メリケン粉　十匁
鹽　少々

胡麻油　七匁

茄子、するめ、蒟蒻の酢味噌和へ

茄子　八十匁
するめ　九匁
こんにやく　七十匁
酢　十匁
味噌　三十匁
辛子　少々
砂糖　二匁
酒　五匁

乾鱈はこの間の如うに水に灰汁水を同じ量に加へ一晩でなくとも使用一時間前に肉を細くさいて浸け例の通り水なり微温湯にて灰汁氣をぬき俎の上にてよく肉を庖刀にて揉みつぶしメリケン粉に鹽を加へて餘り軟らか過ぎぬ位の程度にとき夫に鱈を混ぜてよく揚げる若し鱈の浸けたものを買ふ場合いづれ臭味の高いのは免れられぬ故肉を揉みほごしたれば柚子かレモンか生姜を少々落せば異臭はとれる。

次に茄子は瓦斯火又は炭の上にて燒き洗つて皮を去り竪に切つて別にするめは刻みずるめに二三庖刀を入れ短かくして油一滴の中に入れ二三度振つていためこんにやくは板なら三枚位（絲又は白たきならば適宜の長さに切つて用ひてよし）に下して横に細く打ち鹽揉みして湯がき水氣を榨つて酢少々と酒五匁の中三分一位をかけて置く、味噌は砂糖、酒及酒にてとき右の品々を和へても又はしき味噌にしても乃至は皿に盛り別けてもよく辛子は味噌の上に置く。

此外臨時の御馳走に豆粕團子を紹介する、豆粕は水に浸けて置いて擂鉢でよく擂つた後豆の三分一程の量の馬鈴薯の茹でゝ潰してあるのをまぜ鹽少し加へて丸めメリケン粉をまぶして油で揚げる。

（注意）　蛋白質の量及温量は大方のいつもの量に同じ事なのと紙面の都合により省く、但し充分足る程の二千足らずの温量だけ毎日鹽梅してあると知つて欲しい。

蛋白質だからとてもどれもが皆人間の榮養になると考へてはいけないきのこは蛋白質に富んだものであるけれど其蛋白質は植物細胞素といふ消化し難いものと結び付いてゐるから耳は消化されない、澱粉は炭素であるが同じ炭素である炭を嚙る譯にも行かず例へばきくいもは澱粉であるが此中にはイヌリンといふものがあつて之が消化する時果糖が

出來るから非常に榮養になるのだけれど是は人間の消化し得る物でない、併し黒い黴の黴菌に合ふと實に不思議な位に溶けるので食物は夫々適ふ物に出合つてい〻働きをするのであるから複雜な獻立を要するのであると。

（朝）　纖牛蒡揚豆腐味噌汁

牛　蒡　十五匁
油　揚　五　匁
味　噌　五十匁
煮　干　一匁五分

牛蒡は例の如くさ〻がいて水に放し油揚は堅に庖刀を入れて横に細く切り味噌汁の中に兩者及煮だしを一緒に入れ二度程沸立たる程をよしとす。

（晝）　鰊豆粕の佃煮

鰊　二十匁
豆　粕　二十匁
砂　糖　五　匁
醤　油　五　匁
生　姜　五　匁

鰊は前に述べた如く灰汁水か白水に浸けた物をそぎ身にし豆粕は水につけ皮のとれたるを鹽水に一時間半程浸し置く是れは豆粕には鹽味甘味が中に徹らないので味を徹させる爲にするので鹽水から揚げた豆粕を油少々にていため鰊を一緒にして茹でるか又は豆粕を油でいためずに最初から鰊と一緒に茹で〻其中に油を一滴落し豆のふくらむ頃に火を弱くして沸立て砂糖を入れて再び沸立てたる後醤油を入れる生姜は最後に纖にして其中に加へ鰊の臭味を取る、若し油を入れる事により濃厚になり過ぎ又は油臭いとあらば酢を一二滴落すと味は淡白になる。

（夕）　薩摩汁

豚　肉　十五匁
大　根　五十匁
さつま芋　五十匁
にんじん　十五匁
牛　蒡　十　匁
醤　油　十　匁
胡　椒　少　々

さつま芋の梨もどき

さつま芋　十　匁

砂糖　六匁
酢　五匁
鹽　一匁
酒　少々

さつま汁は肉野菜を皆一緒に水より入れて二時間位煮る汁の濁らぬをよしこす、野菜中さつま芋は最も崩れ易きものなれば薄く切らずに纎維を長く厚く賽の目に切るべし、二時間位煮てから醬油を入れまた好みによつては味噌を用ふるもよく醬油を入れたる後は二度位沸立たせるをよしこすさつま芋の梨もごきは芋を纎にして水に放ち砂糖、其他を以て煎りつけるやうに煮る、これは名の如く梨の味ひに出來上がればよく出來たるものこ知るべし。



雜報

○家事科學展覽會

東京敎育博物館にては我が家庭に於ける衣食住に關する衞生及び育兒等の全般に亙て科學的知識を鼓吹し、併せて各學校に於ける家事科敎授の刷新に資する爲め來る十月二十五日より十一月三十日迄家事科學展覽會を開催し、緒方、横手、石原、河本、土肥、磐瀨、二木、三宅、佐々、太田の各醫學博士、二階堂內閣統計官其の他各方面の專門學者の指導を仰ぎ、內務、文部、陸軍の各省、東京醫科大學、傳染病研究所、警視廳、東京府及び市等に陳列品の貸與を交渉し、其の種別を左の如く定め、猶ほ開期中通俗講演會等開催の企ありこ。

一、被服の科學的研究
衣服の材料、衣服の構造、衣服の保存、寢具及び帽子、履物類其の他

二、飮食物の科學的研究
各種飮料食品原料、食物調理、飮食物の保存其の他

三、住宅及び家具器物の科學的研究
住宅の構造、室內の設備、家具及び器物、家に住む有害動物の驅除及び豫防法其の他

四、家庭衞生の科學的研究
病毒傳播、淸潔及び消毒法、救急看護、衞生材料其の他

五、育兒法の科學的研究
哺乳及び睡眠、小兒の飮食物、小兒の被服、玩具、育兒室及び育兒用具其の他

六、家事科教授上の施設
割烹室、洗濯室等の設備竝に生徒實習の狀況を示せる繪畫、寫眞、模型等、家事科教授用具及參考品其の他
七、家庭に於ける迷信の害毒
衞生上に及ぼす害、經濟上に及ぼす損害其の他

○東京市の井戸

東京府衞生課にて最近十年間に市內三百三十二箇所の井戸を調査したる所によれば、飲料に使用し得るは僅かに八箇所に過ぎず、細菌數は牛込最も多く二萬七千、次は本鄕、芝の順序なるが、最も少なき麻布にても十二三滴中に三千八百を算すと。又水質の硬度高きは四谷を第一とし、次は淺草、麴町なりと硬水は洗濯しても落ち惡く、工業用には水垢つき易く、飲めば下痢する傾あり。

○電氣火葬株式會社の創設

今回幾名かの有志者は東京博愛株式會社と稱するものを創設し、人畜の電氣火葬、胞衣及び產時汚物の取扱竝に燒却埋葬、共同墓地の開設を營業目的とする由にて事務所を淺草區南元町に置き、高村國策氏を創立委員長に擧げたりと。

○名古屋市の結核消毒施設

肺結核豫防上患者竝に汚染物件消毒の爲め、愛知縣名古屋市、同碧海郡安城町及び同矢作町に於ける消毒設備に關し、同縣知事より內務省衞生局に報告ありたるもの〻中名古屋市に關する大要左の如し、

一、事務所の位置　名古屋市中區南鍛冶屋町三丁目二番地愛知結核豫防會
一、組織の大要　結核豫防會は肺結核及び喉頭結核の豫防撲滅を計らんが爲め、篤志會員を以て組織し現在に於ける會員は千二百四十名なり
一、設置年月日　大正四年七月十五日
一、消毒設備
一、「ホルマリン」發生器　一個　二、同消毒箱　一個
三、昇汞水容器　一個　四、石炭酸水噴霧器　二個
五、蒸氣消毒の設備なきも、豫め市に交涉しありて、其の要あるときは市立城東病院(傳染病院)に於て蒸氣消毒を行ふ
一、豫算額　金貳千五百五拾貳圓
一、消毒料金
(イ)消毒品運搬料　蒸氣又は藥物消毒料金の三割を申受け、一回の料金を金二十錢以上とす
但し貴重品又は破損し易きものにして特別の取扱を要するものは此倍額とす
(ロ)建物消毒料　病室及び寢室は一室に付き金壹圓以上參圓以內、其の他は一室壹圓の割、便所は一ヶ所に付金五拾錢、特に物品消毒依賴ある時は別に左の料金を申受く

蒲團	十錢	敷布	二錢	小兒用蚊帳	五錢
羽蒲團	二十錢	掛布	二錢	毛布	八錢
同側	十錢	枕	二錢	衣服類	五錢
座蒲團	三錢	蚊帳	十錢	肌着類	三錢
男帶	三錢	看護衣	三錢	雜貨物	三錢
女帶	三錢	手拭	一錢	疊	十五錢
帽子	二錢	小組	一錢	書籍	一錢
前掛	二錢	反物	三錢	軸物	十錢
手袋	二錢	風呂敷	三錢	茶碗、皿	一錢
足袋	二錢	袋物	三錢	盆	二錢
脚袢	二錢	カラ	一錢	椅子	十五錢
洋服	五錢	ネクタイ	一錢	指環	二錢
トンビ	六錢	胸當	一錢	置掛時計	一錢
外套	六錢	卓子掛	三錢	懷中時計	五錢
消毒衣	三錢	窓掛	三錢	手術衣	三錢
敷物	五錢				

但し貧困にして消毒料支拂難き方は無料とす

○警視廳の看護婦試驗

本年第二回看護婦試驗は來る十月三、四、五の三日間午前九時より午後四時まで東京府廳內產婆試驗場に於て擧行せらるべし、受驗人心得書は九月二十日より二十五日迄警視廳にて下附せらる。

○看護婦養成所指定

大正四年六月內務省令第九號看護婦規則第二條に依り本月五日地方長官の指定したる養成所左の如し。

大阪府豐能郡麻田村　大阪市立刀根山療養所

○產婆生徒募集

神田區駿河臺濱田產婆學校にては同生徒六十名の募集中、希望者は本月三十日限り出願すべし。

廣告

○入會者

○事務所申込

四谷區仲町三ノ四四齋藤方　通常　三浦常雄

○新潟支會

○中村しげ子紹介

通常　木村ヨシノ子

同　井出ヒデ子

○轉居

芝區より四谷區仲町三ノ四四へ子爵母堂　仁禮壽賀子

巢鴨より小石川區表町五二星野方へ　高峰博

大分縣より岩手縣警察部へ　東海林豐治

本郷區より本郷區西片町十ろノ二十號へ　藤村晴子

名古屋より市外代々木中山谷一六〇へ　槇なみ子

以上

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁 東伏見宮妃周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 岡田德子
同 山本多穗子
同 松平芳子
評議員 入澤常子
同 濱田捨子
同 原みつ子
同 西外子
同 緒方悅子
同 小川孝子
同 片山龜子
同 丹波貞子
同 田村きよ子
同 鶴原誠子
同 中濱芳子
同 子爵母堂 松井正子
同 小松いさ子
同 天野多喜子
同 菊池米子
同 宮木樂子
同 長谷川仲子
同 高木鍱子
同 三浦敎子
同 羽田三緒子
同 服部繁子
同 仁禮壽賀子
同 土肥多越子
同 岡山とし子
同 男爵母堂 加藤鈴子
同 吉岡彌生子
同 高橋孝子
同 武田貫子
同 男爵夫人 南部限子
同 山口貞子
同 古市幸子
同 近藤憲子
同 岸澄子
同 三宅藤子
同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一册 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三册（三ケ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二册（一ケ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁 六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌購讀申込ノ節ハ前金三ケ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵劵ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ購讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正七年九月二十七日印刷
大正七年九月三十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込千駄木町五十八番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 櫻井新三郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 合資會社 杏林舍

發行所 東京市本郷區駒込千駄木町五十番地 私立大日本婦人衛生會事務所（振替東京一〇六〇〇番）

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鍋屋町 東明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市榮町六丁目 丸善書店


胃腸新劑
タカヂアスターゼ
工學博士 藥學博士 高峰讓吉氏發見
强度優越
効力不變
澱粉不消化に起因する胃腸疾患に應用して卓効を奏するタカヂアスターゼは、更に脂肪の消化吸收をも容易ならしむる事を發見せられて以來、愈々
完全なる消化劑
として學會に承認せらるゝに至れり、故に本劑を服用する時は食慾を增進し、營養を佳良ならしめ、體量を增加す、而して本品を結核患者に應用するは消化吸收を良好ならしめ營養を增進するが故なり。
▲類似品を厭し特にタカヂアスターゼと御指定を乞ふ
▲說明書あり御申越次第進呈す
東京室町
三共株式會社
TAKA-DIASTASE
タカヂアスターゼ
100 TABLETS
タカヂアスターゼ錠
TAKA-DIASTASE